資源環境経済学特別演習 II 議事録（2 月）

２０１１ 年 度 第 １３ 回

報告題名　内モンゴル地域の経済発展に伴う在来住民の家族形態の変化	
報告者　ナスンムンク	**日時 2 月 2 日　午後３時～**
（所属分野） 国際開発学	**場所　第三講義室**
座長　中村　彰宏	**議事録担当者　渋谷俊**

出席者

長谷部、木谷、安江、小山田、米澤、米倉、冬木、高篠、伊藤、石井、韓、スチン、神浦、宮里、池田、易思、威廉、王、北村、金、滝田、タンボウニ、中村、堀、山口、泉井、金、今井、渋谷、室井、ナスンムンク、劉、伊藤、佐藤、西田、門馬、菅原

報告要旨

本研究は、南満鉄株式会社の調査の実施した満州国興安北省実態調査報告書とＸ牧村での現地調査に基づいて、当地域の経済発展に伴う生産方式や家族形態の変化を明らかにし、その背景を描き出すことを目的としている。

質疑・応答

中村：エヴェンキ族は中国、モンゴル、ロシアにいるそうですが、それぞれ同じ民族だという意識はあるのでしょうか。

ナスン：中国ではエヴェンキ族は法律で規定されている。ロシアやモンゴルでは、族ではなく人種として分けている。それぞれのエヴェンキ族は、同じエヴェンキ族だというアイデンティティを持っています。

米倉：そのアイデンティティの基礎になっているものは何ですか。神話、言語、共通の敵と戦った経験などを共有しているのですか。

ナスン：言語は、それぞれ違います。方言と表現されるが、お互い通じない。同じ祖先を持ち、同じ神話を持っているが、なぜ同じアイデンティティを持っているか確証はない。私も、興味を持っているところです。

米倉：歴史、神話などはドキュメントとして書かれているのか。

ナスン：口で伝承されているのもあるが、記載されているものは 1730 年以降についてしかない。それ以前のものは口で伝承してきている。

米倉：1730 年となると、清朝とロシアが明確に別れた時だと思うのですが、ロシア語と中国語両方で記録が残っているのか。

ナスン：ロシア語はまだみていないが、満洲語とモンゴル語で記載されたものが多い。

米倉：満洲国で書かれた文献が多数あるはずだが、それについては探しましたか？

ナスン：調べたところ、千葉おそらくアジ研にあるそうです。

米倉：まずはそれを徹底的にあらってください。

長谷部：テーマに関して。家族形態の変化とあるが、今どのように変わっているのか。

ナスン：20 年前から定住するようになりました。家族としての変化もあるが、生活様式の変化の方も一環として、注目しています。

冬木：昔のゲルだと大きな親戚同士で住んでいたが、定住するようになって家族だけになったとか、そういう変化はありますかということです。

ナスン：それはあります。

長谷部：家族形態の変化を主に捉えるのか、生活様式を捉えるのか。
ナスン：エヴェンキ族の全体を捉えたいと思います。
米倉：エヴェンキ民族史ということですね。
長谷部：最初からそう書いたほうがいいと思います。
米倉：X 牧村に戸籍はあるが、都市部に住んでいる人とかはいるんですか。
ナスン：そういう人はいます。逆に戸籍はないが X 牧村に住んでいる人もいます。しかしそういった人は今回の集計には、入っていません。
米倉：調査は、そういった人たちも含めて調査するということですね。
ナスン：はい。
米倉：115 人のうち、都市に住んでいる人は何人いるのか。
ナスン：十数人いました。
米倉：ということは、居住地に関して、法律と実態の間に多少の乖離があるということですね。あと、ロシア系の 1%はどういう意味か。
ナスン：父親がロシア人で母親が中国人で、その子どもを指します。
米倉：家族形態の変化を見るために、土地の所有状況やとりわけ土地の相続について、法律や実態がどうなっているのか調べると有効だと思います。

小山田：エヴェンキ族の文化は近代化により、薄くなってきているのか。
ナスン：質問の前に、今エヴェンキ族が近代化して日本人と同じようにみえるのもエヴェンキ族の文化だと思います。質問については、エヴェンキ族は元々トナカイで遊牧していて、それは行わなくなったが色々残っている部分はある。例えば、シャーマニズムとか。伝統的な部分がなくなっていることはないと思う。

池田：ロシア系の 1%は一人だと思うのですが、なぜここに住んでいるのか。
ナスン：これは偶然です。奥さんが中国人で商店を営んでいて、ロシア人の夫がそれに付いてきたという形です。
池田：民俗学的な研究は、政策的なインプリケーションが少ないが、いかに知的におもしろいかで勝負するものだと思う。そういう意味でエヴァンキ族に興味が湧きました。